

資料編

〈ヒアリング調査記録〉

ヒアリング① 友澤 昭江 氏（桃山学院大学教授）…………… 29

「留学生のフォローアップ事業」の事例／さまざまな「留学生」／留学生の日本での就労問題／外国人観光客も見直す日本／日本語教育は「第二バブル期」／日本語学習人気を支えるもの／大学等の留学生ネットワーク事業／アジアの学生に人気のものづくり系学科／日本語を話せない残留邦人一世／残留邦人への日本語教育

ヒアリング② 留学生 A氏…………… 36

きっかけは指導教官同士のネットワーク／日本的な雰囲気を求める中国人観光客／私立大学はもっと海外でPRを／中国の高校生は日本の大学をブランド・イメージで選ぶ／日本で研究職での就職は難しい／若者向けイベントと体験型観光の発信を

ヒアリング③ 平弥 悠紀 氏（同志社大学日本語・日本文化教育センター教授）／ 木谷 真紀子 氏（同准教授）／櫻井 千穂 氏（同准教授）…………… 40

留学生の宿舎不足が課題／障害を持つ留学生をサポートするために／医療情報等の日本語翻訳の公的サービスを／京都の「国際化」を留学生に手伝ってもらう／伝統行事等を通じた留学生同士の交流／

ヒアリング④ 田尻 英三 氏（龍谷大学名誉教授）…………… 44

正規留学生と交換留学生がねらい目／留学中から情報発信してもらおう／企業に求められる日本型雇用システムの説明／観光案内、交通案内をわかりやすいものに／大学は明確な留学生政策の指針を／日本語教育を文化戦略として位置づける

「留学生のフォローアップ事業」の事例

- 企画書を読ませていただき、国や自治体の「留学生のフォローアップ事業」について少しネットで調べたり同僚に尋ねてみたりした。まず日本学生支援機構の「帰国外国人留学生のフォローアップ事業」。日本でディグリーを取った人が国へ帰った時に、日本で学んだことが活かしているかどうか、日本にいた時の指導教員と連絡を取ったりするフォローアップをしているが、あくまでそれは研究面でのサポートで、個別的に京都という土地に縁があるようなフォローアップではない。留学生担当部署である、うちの大学の国際センターの職員に聞いたら、学生支援機構は受入数とか受入教育とか待遇とか、年間何十項目も調査して、ちゃんとやっていたらポイントのようなものが加算されていくらしい。その中に卒業した学生の「跡を追いかけているかどうか」という項目があって、やっているところにはお金がつくとかのインセンティブがあるらしい。微々たるお金ではあるが、これをやっておけば、他の案件で文科省の覚えがめでたいということが間々あるらしいが、明確にそうだと確証はない。学生支援機構は国の施策を代行しているわけで、留学生を「追っかける」必要があるという認識はあるようだ。
- それから経産省がらみで「留学生支援ネットワーク」がある。数年前まで「アジア人財資金構想」と言っていた。アジアに特化したプロジェクトで、日本に留学してディグリーを取っていても取ってなくても良いのだが、留学生の日本での就労を支援しようというものだ。しかし、今ひとつ盛り上がっていないと聞いた。そこが平成 28 年度 (29 年 8 月 31 日まで) の事業として「留学生 OB・OG ネットワークシステム (SNS) 構築事業」ということで、「アジア人財資金構想」に参加した OB たちに情報支援を行うシステムの運用を準備しているようだ。「留学生 OB・OG 同窓会の開催」という事業も平成 24 年度から実施しているからネット等で調べてほしい。
- 以上が国がやっている 2 つの事業だが、文科省は留学生のフォローアップ事業をあまり一生懸命やっているようには見えない。あとは地方自治体やその外郭団体、それぞれ留学生を受け入れた大学の事業になる。例えば、留学生フォローアップとは少し違うが、うちの大学は日本語教師養成課程を持っていて、今まで日本語教師の資格を取ろうとする人は、いわゆる教育実習は必修ではなかった。ところが 2019 年度から実習が必修になる。日本語教師を目指す人が日本語を学ぶ学生に教える機会がなかなかなく、大学としては少し慌てている。ただ兵庫県国際交流協会 (HIA) は、もともと在住外国人のための無料日本語講座を 20 年以上前から開いていて、以前から教育実習の機会を設けてくれていた。兵庫県国際交流協会は、神戸の人と防災未来センターや県立美術館と並んでいる国際健康開発センターというきれいなビルの 2 階に入っている。
- 通年で無料の日本語講座を開いていて兵庫県在住の外国人には有難い存在だ。夏の約 4 週間は夏休みになり、その間日本語を学ぶことを兼ねて、観光目的で世界中からやってくる訪日教育旅行を受け入れている。毎年約 60 名やってくるがこれも無料だ。日本語のレベルでいくつかのクラスに分けて、日本語教師を目指す実習生を受け入れていた。始まったときから姫路独協や神戸松蔭、桃山学院とか日本語教師養成課程を持っている大学の実習生を受け入れてもらっている。ビシビシ鍛えてもらえる素晴らしいプログラムだった。ところが、受け入れる現場の先生方から実習生の受け入れがしんどいという声が出て、残念ながらその実習プログラムはなくなった。ただ、日本語を学ぶ講座のほうはまだ続いている。通年で住民向けの日本語講座があり、夏休みの間は世界中から神戸に来て日本語を勉強する。初めて来た年はいちばん下のクラスだったのが、次の年は上のクラスを目指すというようにリピートでやって来る人もいた。3 週間午前中授業を受けて、午後は神戸やその他の土地を見て回る。向こうは夏休みが 2 カ月くらいあるから、3 週間は神戸で日本語を学ぶということだ。

さまざまな「留学生」

- 留学生も大学・大学院に来る人、美容師や調理師の専門学校に来る人、それらに入る予備コースとして日本語を学ぶ人、いろいろだが、数としてはやはり大学・大学院に入学する留学生が最も多い。国の「30 万人計画」もある。入管による在留許可の審査はその年により厳しさの度合いが異なることがあるようだ。閉めろとなると、少し厳しく書類をチェックしてはねてビザが下りない。増やそうとなると書

類チェックを緩くしてビザを出す。留学生には「学生」カテゴリーと、これまで3年間という期限を切られて農業や漁業を学ぶ「技能実習生」カテゴリーがあり、後者は現場の労働力不足を補っている。ただ建前はさまざまな技術を学ぶということになっている。フルのお給料が出ないから、問題はいろいろある。その際、特に日本語習得が義務ではなかったため、これまで十分な日本語教育がなされてこなかった。ところが、さすがにそれはダメなので簡単な予備教育もやっていたが必ずしも十分ではない。他所の給料が良ければ「脱走」してしまうという事例はたくさんある。アルバイトというのではなく、システム自体がブラック的ではある。

- 現場にはそういう人たちがいないと成り立たないという声がある。今度期限3年が5年に延びた。「移民」は入れないことになっているが、彼らは移民とも言える。3年終わって帰ったら、しばらくは来れない制度だ。居続けさせると正規の「労働者」になってしまうから、建前として入れない。しかし、ブラックではなくて親方とかといい関係の職場もあるから、もう少し居させてあげたらお金も貯まるし…ということで5年に延びた。今後は介護士、看護師、それから家事労働がOKになった。フィリピンなどからハウスキーパーを呼んでこうとしているのだと思う。そのための日本語教育をどうしたらいいか、我々のところに聞きにくる。いろんな産業領域で労働力が不足して、それを何とかしようとしているのだけれども、いちばん上の政策レベルで踏ん切りをつける必要があると思う。少子化もあり、それほど高い技能が必要でない労働も絶対に必要なものだ。それをどうするのか解決しないままでは、ますます本来あるべき姿とは違うおかしな方向に行ってしまう。

留学生の日本での就労問題

- 留学生自身の日本での就労を考えたとき、残業が当たり前のような日本企業での働き方を強いられるならば、二の足踏むところはあるだろう。それでも大学を出たばかりなら、しばらくは日本企業のノウハウを吸収したいから雇ってほしいという留学生はたくさんいると思う。日本人の若者なら、できれば定年まで勤め上げようという人は多いだろうが、中国人なら3年教えてもらったなら独立するとか、定年まで勤め上げる意志を持った人は少ない。日本の企業として、それが分かっている人に初期投資をどれだけして、技術やノウハウを全部伝えて…となるかどうか。雇用者との信頼関係の問題かも知れないが、日本とは違い、アメリカでもヨーロッパでも、キャリアアップのために次々会社を替わっていくのは常識だろう。そのあたりは専門ではないので何とも言えない。
- 日本の大学を正規に4年出た人、特にアジア系の人には日本語はできる。いい加減な日本人学生より、よほどちゃんとした日本語を話せるし書ける。うちの大学にも欧米系の交換留学生がやって来るが、向こうの就職事情が悪いこともあり、日本で働きたいという人はものすごく多い。日本はまだ雇用が安定しているし、何よりいろんなことを教えてくれるということがある。新入社員なら2年くらいはみんなが手を差し伸べてくれる。しかし、彼らも大半は日本の企業で数年働いたら、当たり前のよういきっとどこかに移ってしまう。日本にも移っていくのがキャリアになる業界もあるのだろうが、日本企業からは「もっと終身雇用に近い形で頑張ってはどうか」という声は聞こえてこない。仕方ないと思っているのか、日本人の雇用と外国人の雇用についてはダブルスタンダードになっている。欧米人やアジア人の中にも、昔の日本人のようにコツコツと働いて終身雇用というか、堅実な人生がいいとする考えの人もきっといる。特に就職事情の悪いイタリア人などは日本で働きたいはずだ。
- 特に中国の留学生は一国一城の主になりたいというタイプが多いのは事実で、長くても10年しないうちに日本企業のノウハウを学びネットワークを利用して独立するというケースがほぼ100%ではないか。会社に1,000万円儲けさせても自分は300万円しかもらえないなら、じゃあ経営者を目指そうというメンタリティが強い。
- 日本はほとんどが中小企業やサービス業で、留学生を雇うという場合、通訳とか添乗員のようなインバウンドのためだけのセクションに限定して配属するのか、日本人と同じように彼らも企業の重要な決定事項や企画に関わっていききたいと言えば認めるのか、企業の意思がどちらにあるかだ。たぶん京都の企業にも前者が多いのではないか。雇われる留学生のほうもそれが「見えた」とき、長居はしない方向を選択するはずだ。キャリア形成のために勤めたのに、限定的な仕事なら不満が出るだろう。グローバル化への対応とか言いながら、企業の側が外国人留学生をどう使いたいのかによる。

外国人観光客も見直す日本

- 外国人観光客について言えば、アトキンソン氏が言っていたが、京都は高級なホテルに泊まる欧米人が多いが、大阪はLCCでやって来て市内の違法民泊に泊まってラーメンを食べて安物の化粧品を爆買いするアジア人が多いと。とにかく大阪市内は違法民泊が多くあると言われる。心齋橋や難波周辺に特に多いとされる。韓国の人は韓国の人がやっている違法民泊に泊まる。ネットでみんな予約する。ちゃんとしたホテルに泊まる人も多いのだろうが、その何倍ものアジア人が合法、違法合わせて民泊に泊まっていて、野放図状態だ。京都のように「叩こう」ともしない。リピーターになって来続けてくれればいいが。今中国でトヨタの日本車が売れているそうだが、その理由は、実際中国人が日本にやって来て親切な日本人に接し、きれいな町を見て日本を見直し、日本に対する意識が変わって、日本車も再評価するようになったからではないかと先日大手新聞が書いていた。
- もともと大阪は在日韓国・朝鮮人・中国人の人が多く、市民の人権意識も強いが、ソフト面でも大学生が本名を名乗る率も高くなっていて、友だちにもフランクに本名を名乗る。修学旅行にも韓国や中国にどんどん行く。国際結婚に対して親も反対しない。特に保守的な女親の意識を変えたということで韓流ブームのペヨンジュンはすごいと思う(笑)。しかも若い男の子や女の子の新しい音楽グループが次々に出てくる。文化の力はすごい(笑)。

日本語教育は「第二バブル期」

- 私の専門は日本語教育で、日本人でも留学生でも日本語教師志望の学生を教えているが、日本文化事情とかの科目で留学生に俳句を作らせたりもする。留学生の場合、母国にはそういう資格がないのでうちの大学のように教員養成課程のある日本の大学に来て資格を取る。今大阪では日本語を学ぶベトナム人とネパール人が急増している。中国・韓国からは途切れることなく来ている。今日本語教育は「第二バブル期」で、4年生でまだ資格を取り終えていない学生なのに「それでもいいから教えに来てほしい」という日本語学校からのリクルートがすごい。岡山から米子から全国から来る。一時期日本語学校がバタバタ倒れていたのに、えらい違いだ。急に増えたのがベトナムとネパールで、留学生も専門学校等も増えている。一時中国に進出した企業がベトナムに流れて行って…という事情を反映していると思う。もちろん相変わらず韓国・中国の学生も一定いて、自国に帰って日本語の教師になる人もいる。
- 京都は京大が2,000人、立命1,400人、同志社1,100人がトップ3だが、1,000人の留学生とはすごい数だ。京大は日本語教育のような実利的な分野にはあまり関心を持たない傾向があるからか、日本語教師養成課程としては持っていない。課程を持つ大学は限られているが、これまで卒業後に教えるのは日本国内の日本語学校がメインだった。しかし、日本語学校は浮き沈みが激しいので経営的に専任の講師を採らない。講師のお給料は時給換算になって、「男子一生の仕事」にはならないという根本問題がずっとある。1980年代にCDIの日本語教育プロジェクトで提言したように、ゲーテ・インスティテュートやアテネフランセ、ブリティッシュ・カウンシルのように、世界中に日本語を展開したいのであれば、国が人的リソース、一定レベル以上の講師陣をプールして要請のあった地域に派遣しないといけないということだ。
- 給料を出して任期が終わったら帰ってきて、次の任地に行くまでの間も有給で研修を受けさせたりするというように、国として一括管理してやるべきだろう。80年代半ばから世界中で日本語ブームになり、大学に養成課程を作れと言うので作ったが、どこで教えると言った場合に国は一切面倒は見ないというのはおかしい。今もそういうシステムがない。文科省なり文化庁が国際交流基金のような外郭として、きちっとしたライセンスを発行するような自国語普及のための機関、世界中どこへ行っても日本語を教えることができる人材を一括でプールするような機関を持つべきだと思う。
- 中国も孔子学院としてそれを始めている。立命館などは梅田に孔子学院を持っている。中国がお金を出して運営しているが、お金を出す分しっかり口も出す。向こうは重点大学として東大・京大・阪大には声をかけているし、大学として声をかけられるかどうかは1つのステータスになっている。大阪産業大学などは最も早く誘致した。あそこは自動車学部という学部があって整備工を養成するのだが、その定員の9割が中国人らしい。たくさん人材を養成してくれたお礼のような形で孔子学院がある。わかり

やすい理屈で世界展開している。私の大学もヨーロッパ有数の大学と提携していて時々調査に行くが、みんな孔子学院がある。学生だけでなく、一般の人に中国語を教える場所としても大学を確保するという狙いがある。韓国も世宗（セジョン）学堂を始めた。世宗とは15世紀にハングルを作った名君の名前だ。そして、言われるのが「日本は何をしている？」。

日本語学習人気を支えるもの

- 一時期中国の勢いがすごかったので、世界各地の大学は日本語学科をつぶして中国語学科にしたが、今は日本語が戻ってきている。特にヨーロッパでは激増している。去年提携校のベネチア大学でヨーロッパ日本語教師会の研究大会があったので行ってきた。ベネチア大学はいくつかの建物に分かれて日本語関連の授業の教室があるのだが、合計で1,600人が学習している。学習者が多過ぎて教師の数が足りないで、希望者全員を受け入れられていない。ついて来れない学生はどんどん落としていかないと捌けないと言っていた。なぜ日本語を勉強するのか学生に尋ねると「特にない。好きだから」。日本語を勉強したからと言って就職に有利という訳ではないらしい。たまたまうちの大学に留学していた大学院生と食事したのだが、彼はまた慶応から1年間奨学金をもらったのでまた日本に行くと言っていた。彼が大学院で何を研究しているのか尋ねると、岡山の小さな藩の藩主の日記、古文書を解説しているらしい。博士論文はそれを書くと言っていた。でもお金がないので、頼るのは日本の大学の奨学金しかなく、できるだけ日本に長くいて勉強したがっていた。
- それは個人レベルの話だが、そういう「日本ラバー（lover）」がいっぱいいる。そういうアカデミックなラバーもいれば、ジブリの作品はみんな見たという日本のアニメが大好きなラバーもいる。「イタリア語の吹き替え版でなくてオリジナルの日本語で聞きたい、それが夢だ」という高校生がいた。その子のノートを見せてもらったら、トトロの絵とかいっぱい描いてあった。日本のアニメが世界中津々浦々まで、特に若い人たちに浸透していてびっくりする。それに当たるものが中国にはなく、ビジネスしかない。日本のアニメや漫画の影響力を考えると、日本は有利だと思うのだが。

大学等の留学生ネットワーク事業

- 日本のロータリークラブの例だが、米山奨学金という奨学金は毎月15、6万が支給される。うちの大学でこの奨学金をもらえるのは毎年2名と少ないのだが、これをもたらすことはすごく名誉なことになっている。奨学生の集いのようなホームカミング制度があり、もともとの応募書類には「参加した奨学生は必ずSNSで発信することを義務付ける」という規定がある。フルブライトの奨学生も同様にそれぞれの国に帰って日本での集いについて発信するらしい。自分はロータリーの奨学生として留学したのだが、もう40年近く経っているのに、「神戸地区ロータリー奨学生の集い」の案内がずっと来る。そのあたりアメリカはうまいと思う。「ロータリアン」も「フルブライター」もそれなりに誇りを持ってずっと活動している。ロータリー・インターナショナルの本部はシカゴ郊外のエバンストンにある。奨学生制度についてはそこが統括していて、奨学生を選ぶのは各地区の支部が選ぶが、お金は本部が出す。各地区が同窓会をやり、ロータリアンのボランティアによって運営されている。
- 阪大は留学生のケアを頑張っているところもあり、平成27年から「Osaka University Global Alumni Fellow」という制度を始めている。「教育・研究の国際的なネットワークづくりの一環」となっていて、阪大の卒業生や元教職員、留学生も含めて、海外の大学・研究機関で教授等として活躍している人を対象に、この称号を授与するというものだ。授与者一覧として24名がリストになっている。たまたまこの中に1982年に国交回復10年を記念して、日中両政府が始めたプロジェクトとして日本に留学する大学院生150名の予備教育（日本語）のために文部省（当時）の派遣で大連に行った時の教え子の1人が入っている。彼は上海交通大学で材料工学の教授として偉くなっているが、大連ではゼロから日本語を学び、半年で日本語能力試験の1級に合格するほど頑張った人で、1982年に来日して阪大で博士号を取得した。当時の教え子の方々40名ほどが10月に北京で35周年の同窓会を計画している。大連外大でのプロジェクトは5年で閉じられ、今は東北師範大学で継続中だが、親日家のネットワークとも言える。政府同士は時として仲が悪くなったりするが、こういう民間交流、民間外交が大事だと思う。
- 以前、金沢大学にユニークな日本文化のワークショップをやっている人がいると聞いた。大変評判が良

くて、でも彼女が京都大学に転出してからはあまり聞かない。京大も以前から日本語・日本文化研修プログラムをやっている、私も京大に教えに行っていたのはこのプログラムだった。世界のそれぞれの大学で日本語・日本文化を専攻している3年生が来る。1年間だけ日本に滞在して日本語をブラッシュアップしたり日本文化を学んだりする。いわば日本語・日本文化を国に帰って広めてくれる人の教育をやっている。ものすごくいいプログラムだ。ヨーロッパの学生が多く、欧米の大学には「シニアイヤー・アブロード」と言って3年生になった時に1年間大学を離れて世界を見てくるという伝統があり、それで日本にもやって来る。京大はもう30年くらいこのプログラムをやっている。彼らは日本語、日本文化専攻の学生なので将来的にもつないでいけるのではないかな。こういうところにヒアリングしてもいいと思う。

- 京大の留学生課の名物職員Oさんを知らない留学生関係者はいない。2,000人留学生の数十年間のデータが頭の中に入っている。京大の留学生受入れの歴史の生き字引だ。ずっと留学生課で、掛長（京大での表記）もしておられたが、もう退官しておられるかも知れない。在学中も奨学金とかバイトとか、いろんなお世話しておられたので、個人的にいろんな卒業生とつながっている可能性がある。留学生が日本に帰ってきたとき、またOさんを訪ねてくる。いろんなアイデアもお持ちだと思うし、ぜひヒアリングされたらいい。
- 阪大は今頑張っていて、中国留学生にインタビューという動画サイトが公開されている。要は阪大のPRで、阪大へ行ってこんなに良かったというものだ。15人くらいが出てくる。中国人はこういうのを絶対見る。ものすごくアピール力ある。全員中国語で、阪大がいかに学びやすい大学であったか、どんなことを勉強して博士号を取り、今何をしているかということまで話している。こういう形で京都の良さをアピールができればいいと思う。今はネットのおかげで世界中からアクセスできるし、いろんな形が考えられる。面白ければ「ピコ太郎」のようにアクセス数が増える。
- 大阪には、大阪地域の大学と自治体、大商や関経連、国際交流団体等で作る大阪地域留学生等推進協議会という阪大国際部が事務局の協議会があるが、あまり連携活動は活発ではないらしい。たくさんの大学を統括しているのに、HPはあるがあまり情報は出てこないで活発な活動はしていないようだ。阪大も自分のところのPRしかしていない。地域連携で留学生に対応するという発想はいいと思うが、きっと大学間に温度差があって、京都なら京大・立命・同志社のように拮抗する大学があるから連携の価値があるが、大阪はそれがないのかも知れない。

アジアの学生に人気のものづくり系学科

- 同志社大学大学院ビジネス研究科にM先生という方がおられて、彼が京都ブランドの多品種少量で勝負している製造業の跡継ぎばかりを集めて、パリなどで展示会をやって発信している。私もよく存じ上げているので、お話を聞かれたらいいと思う。「京都型ビジネス」ということで、新聞などにも取り上げられた。「伝統産業グローバル革新塾」と言うらしい。京都は二代目の方がいろいろ頑張っている。このあたり留学生の雇用という問題を絡めて聞けば、新しいアイデアをお持ちかも知れない。
- 今日本人の学生には、地味なものづくり系の学科は人気がない。今大学の工学系統の学科は留学生に占められていて、そのうち8割近くは中国人だ。日本の税金で日本の先生が丁寧に指導して中国の人材を育て、結果的に中国の発展に貢献しているのはいかなものかと言う人がいるが、確かにそういう指摘もあり得る。ものづくり系の学科は日本人では埋まらず、ほとんど外国人が占めている。国費留学生であれば、日本国民の税金で最先端の学問や技術を学んで帰る。日本の先生は親切だし、中には結婚の仲人までする先生もいる。みんな帰国して偉くなっているから、回り回って日本にもいいことがあるのかも知れないが、現状はそうになっている。そういう日本の大学で博士号を取ったエンジニアとかを日本の企業で雇わないともったいないし、国家的な損失とも言える。行政はもっとそのことについて主張してほしいと思う。
- 去年うちの大学を卒業した子がシャープに入って、入った途端あんなことになった。「どうしましょ」と言うので「やめたらあかん」と答えたのだが、それが台湾の鴻海が入ることで一気に好転して、今年は「ボーナスが出ました」と言っていた。どうなるか本当に分からない。でも、やはり日本のものづくり

の伝統が流出するのは何とも嘆かわしい。本来は人件費が安いというだけで海外の工場モノを作って移動させるのではなく、内外の優秀な人材が技術を継承しつつ付加価値の高いものづくりを国内で生産し、世界に展開していくのが理想なのだと思う。特に京都や大阪はそうなのではないか。

- うちの社会福祉学科には中国人留学生が増えてきた。中国は高齢化が進んでいるし、社会主義国とはいえ社会福祉の制度が全く整っていない。だから個別に介護のノウハウとかを学びたいということだ。そして国に帰ってそういう施設を運営する。特に農村部には何もないらしい。政府は勝手に頑張れと言うだけで、これまでそんなことはないがしろにしてきて、全くお金を投じていない。13億人の10分の1としても日本の人口くらいが介護の対象になり、資金が投じられるとなればすごいお金だろう。そこにも日本のノウハウはいろいろ生きてくると思う。
- 今回の話は小手先ではうまく行かないし、腰を据えて時間的なスパンを取ってようやく見えてくるような話だと思うので、細々とでもいいから、ぜひ「突き抜けて」ほしいと思う。そしたら5、6年後に「京都はこんなしてるのか」という話になる。京都だからこそできる話だと思う。とにかく京都のブランド力はすごいし、大阪の大学など「京都に近い」というだけで売りの1つになるくらいだ。

日本語を話せない残留邦人一世

- 私は本来専門が日本語教育だが、ずっと中国残留邦人とその家族の研究をしていた。今は残留邦人のひ孫の世代、四世になっている。大阪だと門真、八尾など、優先して住ませる団地がある地域に集住している。中国帰国者の日本語教育は十分なものではなく、成人になって日本にやって来た人たちの日本語能力は滞日期間が長くても非常に低い。大阪大学の科研費チームで大阪府内の小学校で中国ルーツの子どもたちの日本語と中国語の言語能力や家庭の言語環境の調査を行って、全体の報告書を書き終わったところ。子どもたちはみんな日本生まれだが、親は子どもの時に日本に来ている人もいて、日本での定住傾向も高い。いちばん古い一世の人は80年代半ばに日本に来てもう30年になる。
- 彼らは大阪府内で集住しているのだが、面白かったのは、インタビューしたときにおばあちゃんは「最近は楽しみがある」と言う。それは1日おきにデイケア施設から車に迎えに来てもらい、そこは中国帰国者ばかりの施設で、そこで中国の踊りを一緒に踊ったり、お昼ご飯を食べたりする。そこでは介護する職員も中国人。日本語ができなくても中国語で介護してもらえる。そんな施設ができていた。八尾市が運営しているのかと思ったら民間施設で、市は少し補助するだけでビジネスマインドのある人が施設を立ち上げたらしい。びっくりした。そのうちの1人は集住地区に中国の食料品を扱う店を開いてにぎわっていた。コミュニティをしっかりと作っていて、とにかくたくましい。
- しかし、親の世代はとにかく日本語ができない。日本に着た時に無料で日本語を学ぶサービスもあったのだが、とにかく月曜から土曜までずっと働くようなシフトなので、地域の日本語教室があっても疲れて通う余裕もない。ほとんどが東北部の農村の人で、現金収入など想像できなかった。駆り出されて働いても相応の現金収入につながるとは限らなかった。しかし日本では働いたら働いた分だけ確実にお金になったから猛烈に働いた。家で子どもと遊んでいるのはもったいなかった。3カ月働いたら50インチのテレビ、半年たったら軽自動車を買えた。3年たったら、一軒家を購入する家族も出てきた。とにかく物質面での変化のスピードが速い。資本主義のメカニズムからすれば当たり前のことだが、彼らは労働の対価を手にすることを実感したのだ。だから1週間ぶっ通しで両親とも朝早くから夜遅くまで働いて、日本語など勉強する間がなかった。その間子どもの祖父母が子どもの世話をしていた。日本語をしゃべれたとしてもルーティン化した会話で、書くことも読むこともできないままだった。
- 中国出身の帰国者家庭ということで同じ境遇だからみんなお互い助け合うのかと思っていたら、少しでも出身地が違っていると知らない人になって助け合わないらしい。行きつくところお互い信用しない。ところが、血でつながっている親戚は大切にする。何かの縁だから助け合おうという日本人とは少し違う社会関係だ。

残留邦人への日本語教育

- 小学校の子どもたちの親に対して行ったアンケートでは、残留邦人の二世、三世たちは、3分の2は日

本に定住するという結果がある。日本語はできなくても、3分の1は今後どうするか「分からない」と言う。というのは、まだ中国は日本に比べて景気がいいので、帰りたいと思っているし、日本で一定年度生活しても、中国のような密な関係は築けてはいないので、望郷の念にかられて、あるいは淋しいから老後は帰りたいというか、迷っている感じだ。日本語がすごくできて日本に安定した仕事を持っている人は、親も子どもも定住志向だ。日本語ができるだけでずいぶん定住志向の度合いが違う。ドイツの移民政策のように半年間生活費を支給して、しっかりドイツ語を学ぶことを義務付けるということを日本はやっていない。彼らも邦人なのだから日本も日本語教育をしっかりやるべきと思う。邦人にできない国が外国人にできるはずがない。

- 外国人児童・生徒のためにDLAという対話型言語アセスメントツールがあるが、研修を受けないとなかなかあのツールは使えない。1人40分くらいかかる。対話しながらいろんなアクティビティをさせるのだが、やり終わった子どもはやり遂げたという達成感を持って帰る。この評価ツールに慣れていない先生が「こんなができないのか」と言ったり、答えを教えたりするのは良くない。子どもにしたら1人の先生を40分間独占できる。子どもは間違いもあり変なことも言うが、とにかく発話をして自分を出せるテストだ。この分野を掘り下げれば、それを作った同志社の櫻井千穂さんという准教授にもお話を聞かれたらいい。私もよく知っていて、留学生センターにおられるはずだ。彼女はDLAの使い方を教えるために、あちこちを回っていると思う。
- 日本に2年以上いると留学生枠にならないから、うちの大学にもそういう人たちを特別枠で取ってもらえないかという要請が、地域の外国人生徒を多く受け入れている高校からあった。泉北地区に多かったからそこからも何人も入学している。そのうちの1人の学生は残留日本人であった祖母の帰国に合わせて福建省から小学生の時に来日したのだが、従妹も同じ学年にいたので、「何人で帰ってきた?」と尋ねたら「60人」。日本人のおばあちゃん1人に60人がくっついて帰ってきた。残留邦人の帰国の際には家族や親戚だけでなく、姻戚関係のない人もまぎれて来日するケースも時々あり、後にそれが分かって強制帰国となったりすることも報道されたりしている。とにかく強かと言うか、たくましいと言うか、すごいと思う。

きっかけは指導教官同士のネットワーク

- 私自身は中国・広東省で日本語を専攻した。一時日本語教育の教師として働いていたが、留学を志して立命館大学生として日本にやってきた。よく「日本に憧れていたのか」と尋ねられるが、私もそうだが、私のまわりにも純粋に日本に憧れて日本に留学したという人はあまりいないと思う。私の場合、第一志望が無理だったので、たまたま日本語を選んだという運命的なものがある。そういう留学生が多いのではないか。
- 私の中国での指導教官が立命館大学の先生と懇意にしている、立命館大学を紹介してもらったのだが、7、8年前には、教員同士、個人対個人という人的ネットワークを活用しないと留学ルートが見つからなかった。しかし、私の教え子たち、今の世代の学生は、個人単位でなくても語学留学先として複数の大学機関がラインアップされていて、その中から選ぶことができる。私の高校は特殊ということもあるのだが、同級生50人のうち8割くらいが北欧、アメリカなどに留学し、日本や韓国に留学する人は少なかった。お金持ちの子弟が多いということもあり、みんなヨーロッパや北欧、アメリカに行くのだが、あまり裕福でない子が日本や韓国を選んでいったという印象がある。
- 残念ながら私が留学する時にはなく、その後始まった「キャンパスアジア・プログラム」は、東アジアの人文リーダー養成を目的に、立命館大学（京都）、東西大学校（釜山）、広東外語外貿大学（広州）の3大学が共同運営する4年一貫の国際教育プログラム。3つの歴史都市において、2年間で2カ国を2周する移動キャンパスが特徴で、日中韓伝統文化と現代文化に通じた、高いコミュニケーション能力を持つ人材の育成と次世代リーダーのネットワーク化を目標とする有意義なプログラムだと思う。ただ、普通将来のキャリアを考えると博士まで行くのだが、日本にいても就職できないから、修士くらいまで留学する人が多い。大卒程度の留学だと帰国しても大したキャリアにならないし、修士までなら帰ってまだ何かできるという考えだと思う。
- 日本のメリットとしては、中国から近いから行きやすいということが第一にある。ヨーロッパやアメリカだと家族から遠く離れないといけなけれども、日本や韓国だと家族、特に母親が安心する。私の母親も何度か日本に来たが、観光ビザもゆるくなっていることもあり、中国人の多くは日本を「身近な外国」というイメージを持っている。特に上海とかの沿岸部は日本とのLCCの便が増えていることもあり、週末来て帰るという感覚になってきた。日本に留学すること自体も「すごく難しいこと」という考えがなくなった。

日本的な雰囲気を求める中国人観光客

- 京都は良いところばかりではあるが、1つ個人的に不満なのは空港がないことだ。関空まで安い料金で乗り継いで行けるというが、やはり遠い。お金より時間だと思う。私の友だちなども観光で京都に来たりするが、京都というより関西圏として捉えている。そのときいちばん重要なのが空港からの距離だ。若者だから特にLCCで来ると夜遅くや朝早くに着いたりするから、そこからどこにも動けない。電車やバスが動くのを待って2時間半かけて京都に来ることになる。私としては考えられない。お金の問題ではない。日本に来る人はそんなにお金に困っていないし、日本の物価高は知られていて中国も同じくらいだと思う。8年前に来たとき、特に果物や野菜とかは高いと思った。家賃などは同じ金額を出すなら中国だともう少し広いところに住めるかなと思ったくらいだ。旅行者ならホテルの値段が少々高くても高いとは思わないだろう。
- 京都という町はまだ他の都市に比べていいイメージだ。日本はそんなに大きな国ではないし、関西圏という発想からすれば大阪に泊まっても40分で京都に来られる。鉄道網が発達しているので、関西のいろんなところを周れる。京都のホテルは少ないし高いので、多くの観光客は大阪のビジネスホテルに泊まって京都に来る。確かに最近では、若者の間で京都の町家を改造したホステルのようなところに泊まるのがブームになっている。現代の中国人観光客は日本的ないい雰囲気を味わいたいというのがメインの志向だと思う。

- 中国は今、社会の階層化が進んでいて、お金持ちは別だが、一般の観光客は一定の値段でいかに効率的にいろんな名所を周るかということになる。だとしたら、高い京都のホテルに泊まらなくても大阪でいいとなる。一方、私もお金持ちの人たちを案内したことがあるが、ミシュランの三ツ星レストランで食べたり高いホテルに泊まったり、お金の糸目をつけない。それでも中国より安かったりする。あるいは、何度も来日している人は、とにかく高いホテルに泊まりたいとか言う。それは日本的なサービス、おもてなしを感受したいということだ。京都は古典的でエレガントな質の高いイメージができていて、そういう人たちの趣味に応えるような上のクラスの宿泊施設や体験施設をつくれればいいのではないかと思う。

私立大学はもっと海外でPRを

- 私はもともと歴史に興味がありエジプト史とかを勉強したかったが、大学を卒業して留学するときに、こちらの先生の専門が思想史で、母が教員だったこともあって教育にも興味があり、教育思想とか思想史を専攻するようになった。こちらに来てから、中国人であることを活かすなら徳教など中国思想の日本への伝わり方を研究しようということになった。多くの漢文の資料が読める研究で、しかもあまり手のつけられていない研究ということで選んだ。中国の留学生が日本史を研究しようとするれば、近代以降を選ぶ学生が多いが、するとどうしても戦争に関わる部分避けられないし、それをやると自分が苦しくなるという気持ちもあったので江戸期を選択した。
- 京都の大学、特に京大、同志社は留学生が多いが、立命館大学は特に多いと実感する。どこにいても中国語が聞こえてくる。今乗ってきたバスの中で日本人学生が中国のことを話題に討論していたが、身近に中国人学生がいるのでそういう話題を持ち出すのかも知れないし、こちらもつい聞き耳を立ててしまう。
- 自分は私費での留学だが、国費留学生だと一定の試験に通れば日本のどこの大学にでも行ける。以前はやはり東大とか関東の大学に行く学生が多かったが、3・11の震災以降は西日本の大学に来る学生が多くなり、京大にも阪大にも来ている。それは第一に関西圏は「安全」というイメージがあるからだ。それと中国の学生にとって中国の大学はほとんどが公立だから、私立大学という存在自体が胡散臭く見えてしまう。私が国に帰って「立命館だ」と言ってもほとんどの人が知らない。以前(2007年)、温家宝首相が日本に来たときに、立命館大学で学生と野球のキャッチボールをしたというニュースが伝わってから、一時的に立命館の名前は知られたが、それくらいでほとんどの人は知らないと思う。
- 中国国内で知られているのは、関西では京都大学、大阪大学、神戸大学、名前に良く聞こえる近畿大学くらいか。そういう都市の名前のついた大学が権威のある大学というイメージがある。大阪市立大学とかも同じで、実際の実力とは別に、立命館大学や同志社大学という私立大学よりも、都市の名前が付いていることで政府や自治体が建てた大学だからいい大学、という先入観がある。だから後輩が「立命館はどういう大学か」と尋ねてくるのだが、「思想史は東北大と立命館が優秀で…」とか言っても、彼らの就職を考えたときに、やはり立命館は名前のせいで不利になり、立命館を勧めるのは可哀そうかなと思ってしまう。だから京都の私立大学は、もっと海外でその存在をアピールする必要があると思う。立命館も同志社も留学生の支援や就職支援も充実していて、たくさんいいところがあるのだから大学入学以前の高校生にもっと知ってほしい。それは私自身の就職に関わってくる問題でもある。ただ何故か分からないが、中国では早稲田だけはネームバリューがある。たぶん早くからアピールしていたからではないか。

中国の高校生は日本の大学をブランド・イメージで選ぶ

- 立命館大学の留学生への支援施策は、他大学に比べてまだ充実しているほうではないか。留学生の奨学金とか日本語教育、生活情報の提供、留学生向けの交流イベントとか…たくさんある。ただ、私の経験としてお話しすると、奨学金の申請に書類が多すぎて、申請のためにほぼ1カ月間何もできないという状態になる。面倒くさいのであきらめてしまう人がいる。それくらい時間をかけるなら同じくらいお金がもらえるアルバイトに行ってしまうとか、自分の研究に没頭したほうがいいのかという人もいる。もう少し効率的にならないものかと思う。
- 以前、大学の留学生のためのプログラムにも少し参加したが、ほとんどが学部生向けで院生向けはあま

りない。何人か積極的に参加している友人もいたが、私は恥ずかしがり屋のほうなのであまり参加しなかった。逆に外国人ばかりが寄ってしまうと、世界が狭くなるのではという見方もある。私の場合、修士1年のとき、それまでと専攻を変えて歴史学にしたのでイチから歴史学の方法を学んだり、日本の必読文献とかを読むのに忙しかったこともある。私の属したゼミがすごく良かったのは、留学生が多かったのでいろんな国の先輩が細かく指導してくれたことだ。何より先生が、留学生が日本の思想史を学ぶのに必要ないろんな材料を用意してくれていて、たいへん助かった。特に私の場合は専門を変えたので、そういう配慮が有難かった。大学院での制度としてのサポート・システムより外国人の先輩が、日本に来て初めに何に苦しむかとか、どういうことで助けてほしいかといったことが分かっているので、いちばん頼りになった。同じ母国でなくても外国人の先輩、私の場合は韓国人の先輩だったが、たいへん助けてもらった。

- 日本史専修の場合、江戸時代以前だと古文書を読む必要があるので、難しかったが、他の研究会に出たりして自分で勉強して読めるようになった。立命館なら白川静さんのような中国の研究者にも知られている学者もいるけれども、私の担当教官などはトップクラスの研究者なのに中国ではごく一部の人にしか知られていない。だから日本史の分野で留学したいと思っている中国の学生は、個々の研究者の質とかではなく、結局大学のブランド・イメージだけで選ぶしかなくなる。するとやはり、先ほど言ったように国公立というイメージ優先になってしまう。京都の大学にいる教員のアピールも必要だと思う。その著書を中国語に翻訳するといった助成制度があればいいと思う。今の立命館なら、最近では天橋立の「股のぞき」の研究でイグ・ノーベル賞をとった東山先生が中国で有名になったくらいか。そういう面白い研究とかは中国でもSNSとかメディアで広まり、一気に知名度は高まる。
- 自分は将来も日本で就職したいと思っていたが、博士まで来ると就職のルートはかなり狭くなる。修士までだとまだ企業に就職できる可能性はあるけれども、博士までだと年齢的にも難しくなる。教職にしても日本の大学のポストはあまり空いていない上、そこでは職歴が要求される。非常勤の1コマ2コマくらいなら、特に外国人では職歴にはならない。研究員のようなポストはあるが、給与が出ない。ビザも出ないとすると、もう帰国するしかなくなる。

日本で研究職での就職は難しい

- 将来は日本に残って、できれば就職して自分の専門の日本史の研究を続けたいと思っているが、その分野で日本の大学にはポスト自体がなく、日本史なら日本人研究者が山ほどいる。そこで仕方なく中国語を教えるとしても、大学は言語学を修めた人を求める。日本史でも中国語でも非常勤のポストさえないのが現実だ。今の専門分野で中国に帰っても研究は十分進めることはできないと思う。研究のための史料はすべてこの京都、日本にあるから。帰国するとしたらテーマを変えざるを得ない。一部日本人と結婚している人が日本に残る予定を持っているが、それ以外のほとんどの外国人留学生は帰国しようとする。
- 彼らも日本の大学の修士号や博士号を持って帰国し大学に職を求めることになる。しかし、中国の大学などは空きポストが少なくなっているが、トップクラスの大学でなければまだ空きはあると思う。帰国後の日本との結びつきについては、少なくとも自分の学生を日本の大学に紹介することができるようになるということが最も大きなメリットだ。優先的に立命館を紹介することができるし、「キャンパス・アジア」で知り合った各国のOB・OGを通して幅広い交換留学が可能になる。立命館は、留学生それぞれが自国で大学入学以前の高校生に立命館大学のことを広く宣伝してほしいと要請しているが、確かに高校を卒業したら直接すぐに日本に留学したいという生徒を紹介できる。あくまで個人個人のルートがまずあって、それが学校同士のつながりになるというのが基本になる。
- 例えば帰国して大学にポストを得た人が、国際交流基金の研究助成制度を利用して半年から1年再び日本で研究する人はいる。自分が留学していた大学とか、留学時代に知り合った他大学の先生とかに受け入れてもらう。在職する人は誰でも応募できるが、中には遊び感覚で来る人もいて、私としてはどうかと思う。
- 私の最初の京都のイメージは、日本に来る前に見た、貴船神社の前の石の階段に朱色の灯ろうが何本も

立っている風景写真が心に残っていて、その時は神社の名前も分からなかったのだが、いいところだなあ…と思った。知らないまま京都にやって来て、ある時、京都銀行のポスターになっているのを見て貴船神社だと知った。静かで穏やかで、平安時代のような朱色が似合う…京の町のイメージを象徴している。しかし、初めて京都の町に来て思ったのは、正直「ボロいな」ということだ。中国でも都市と言うと高層ビルが林立しているのに慣れているからで、京都はそれに比べると高い建物が1つもないし、静かで落ち着いている町の佇まいはたいへん気に入った。こんなに大学がたくさんある町ということも知らなかった。京都大学と立命館大学は知っていたが、大学都市というイメージも全くなかった。

若者向けイベントと体験型観光の発信を

- 京都に来る中国人観光客によく聞かれるのは「京都の名所は何日間で見られますか」というもので、主な所だけなら2日間で見られる。伏見稲荷や金閣寺、清水寺、二条城…、主だった名所はたいへんお寺か神社になる。しかし、よく来る人はお寺や神社に飽きていて、外国人にはどちらも同じような宗教施設にしか見えない。お寺以外の京都の魅力もアピールすべきだと思う。イルミネーションとかGEARとか、若者向けのイベントもたくさんあり、そういうビジュアルに訴えるものが受けるのに、あまり宣伝されていない印象だ。それから夜が早い。来た時は「あり得ない」と感じた。居酒屋以外開いていない印象だ。京都駅にはヨドバシカメラがあって夜遅くまで買い物できるが、町なかにはない。夜8時以降も楽しめる何かがあると思う。
- 中国の若い観光客が京都では着物を着て町を歩いているのをよく見かけるが、「楽しんでいるな」と思う。ああいう「体験型」が特に若者には受けるのだと思う。知合いのお金持ちが着物を着るだけでなく、カメラマンを雇って1日中撮ってもらっていたのであれにはびっくりした。風景は有形の観光資源だが、中国本国にはあまりない体験型観光こそが中国人には受けると思う。うちの母親は食品サンプルを気に入っていたが、八つ橋など食品づくり体験とか工場見学とかは喜ぶはずだ。
- もし私が中国に帰って京都のまちの情報を送ってもらえるのなら、たいへん嬉しい。でも本当はそういう一部の人限定するでなく、京都の大学情報も含めて広く伝えてほしい。私個人なら教えている学生に「今京都はこんなことをやっている」と伝えることができ便利だが、留学を支援している部門とか大学全体に伝えられるといいと思う。私が以前中国で日本語を教えている時にはそういう情報が入って来なかったし、日本語の教師として日本情報を集めた。民間企業のカシオなどは電子辞書を売るのが目的だとしても、広東地域の日本語教師を定期的に集めて情報交換をする会を開いていた。あれはたいへん役に立った。そういう企業と連携するとかいうことも京都情報の発信のヒントになるかも知れない。
- 国際交流基金が全国の大学の日本語教師を世界の地域別に選抜して研修会を東京で開いている。親睦重視のものでそれはそれで良かったが、そういう機会を利用してもっと日本を宣伝してもいいかも知れない。集まった教師同士で個人的に連絡先を交換したりしたが、もっと広く日本やいろんな国の情報をSNSで発信し合うことができると思った。世界的にはSNSでやり取りするのが当たり前になっているのに、日本ではまだ十分活用されていないように感じる。

ヒアリング③ 平弥 悠紀 氏 (同志社大学日本語・日本文化教育センター教授) /
木谷 真紀子 氏 (同准教授) / 櫻井 千穂 氏 (同准教授) 171212 (TUE)

留学生の宿舎不足が課題

- 同志社大学日本語・日本文化教育センター／留学生別科は、1999年4月に留学生別科として開設され、高度で充実した日本語教育を実践・展開している。本学をはじめ、わが国の大学・大学院への入学を目指す外国人および海外交流協定校が本学に派遣する交換留学生などに対し、日本語を教授し、学生が日本文化に関する理解を深めることを目的にしている。年度により異なるが、約50ヶ国、300～380名程の留学生が、各自の日本語レベルに応じて集中的に学んでいる。また、AKP同志社留学センター、チュービンゲン大学同志社日本研究センター、スタンフォード日本センターおよび、京都アメリカコンソーシアムの学生は、それぞれ独自のプログラムで勉学に励んでいる。留学生別科は現在ではなくなった。
- 大学としてはグローバル化をさらに推進するという目標が掲げられているが、今は別科を廃止し、留学生もそんなに大きく増えていっているわけではない。以前は新しいさまざまな方法で学生を呼び込もうと考えていたが、宿舎の問題があり、多くは受け入れられないという状況がある。交換留学生にしる学部間協定留学生にしる、来たいと言う人はたくさんいるので、増やそうというのであれば、宿舎の問題さえ解決できればいつでも増やすことができると考えている。
- 留学生の宿舎は大学としてきちんと責任を持たねばならないし、民間に丸投げというわけにはいかない。だからと言って大学で宿舎を建てるという計画も聞いていないから、現状維持程度で行くしかないのかと思う。行政には留学生宿舎の斡旋や提供をお願いできると有難い。向島にある京都市の学生センターは遠くて交通費がかかる。交通費の補助とかもあればいい。半年間とかの短期留学生だと定期が買えなかったりするから、短期の留学生の通学面での便宜を図っていただければ有難い。

障害を持つ留学生をサポートするために

- 一般の学生に限らず、障害を持つ留学生も受け入れており、障害を持つ留学生への対応は同志社は他大学に比べて進んでいると思う。留学生も、今までどんな障害であろうともそれを理由にお断りしたことは一度もない。京都での留学生生活が充実したものになるよう私たちは支援している。ただ、学内についてはある程度バリアフリーでいいのだが、大学の門を一步出るとたちまち壁が立ち上がる。去年車椅子の留学生が在学していたので、その経験を文章にまとめた(資料:論文「障がいのある留学生のためのサポートシステム構築を目指して」木谷真紀子)。例えば、京都市にこういう情報を提供していただけたら、ということも書いているので、参考にさせていただきたい。
- 京都市が発行している冊子は、観光客向けの情報は多いが、障害を持ち、しかも日本語のできない居住者への情報がとても少ないように感じている。例えば、その車椅子の学生は、地下鉄ほか市内の駅はたいていエレベーターがついていると思い、出町柳から叡山電車に乗ったらスロープのない駅があって困った。そのような情報がない。アメリカなどでは、車椅子使用者が入れない建物があれば、その時点で建築士が免許をはく奪されるくらい厳しい。留学生本人は、車椅子だからといってまったく不自由な思いをした経験がなく日本に来ているから、よけいパニックになる。空港リムジンバスに乗れなかったり、住む場所によってはスロープがなかったり、大学近くの商店街のお店も車椅子では入れなかったりしたので、とても苦労した。
- だから、車椅子でも使用できるお店の地図や情報が区ごとに多言語版であればいいな、と思う。前もって日本語のできない人に配っておけば役に立つし、災害のときなどにも活用できる。
- 留学生だけでなく外国人には、日本人にとって当たり前のことが当たり前でなく、経験がない。その学生はカリフォルニア出身だったので、向こうは年に3、4回しか傘がするような雨が降らないため、来たたん毎日雨というのも未経験で困った。留学生の日本語レベルはさまざまであるが、日本語ができなくても買い物のできるお店のリストが掲載された生活圏マップなどが複数の言語であれば、障がいがあっても心強い。外国人留学生だけでなく日本人で同じ境遇の人にも役に立つ。
- 「障害者手帳」の役所への申請も外国語訳が壁になる。日本人でも何か月も待っている人がいるから、4

月に来た短期留学生は発行されるまでに帰ってしまう。例えば、そういう留学生を受け入れている本学のような機関が概要や申請方法の外国語訳を作成することは不可能ではないが、誤りや機関による齟齬が生まれる可能性が高くなる。障害があり日本語のできない留学生やその家族が必要とする情報は、医療や住宅、税金等生活全般に及ぶから、必要な情報をまとめた冊子の作成をぜひお願いしたい。

医療情報等の日本語翻訳の公的サービスを

- 障害者手帳があればいろんな優遇措置が受けられるのだが、障害者手帳を申請するために診断できる医師は、障がいによっては京都や関西全域にもいない場合がある。例えば、現在在籍している視覚障がいの留学生の障がいを診断できる医師は大阪の南のほうの病院で、目が見えない状態で交通機関を乗り継いで行かないといけなかった。日本の生活に慣れておらず、地理や交通機関について知らない留学生だからこそ感じざるを得ない不便、不自由があるということだ。行政もそこまで認識してくれているとは思えない。同志社大学は障害学生支援の古い歴史を持っていて、学習・研究についてはすべてサポーターが個別に担当するなど支援体制は充実しているが、学習以外の生活面が問題になる。
- 交通機関の使い方に慣れるまで難しい。車椅子の学生が市営地下鉄に乗ろうとしたら「いちばん前で待っててね」と日本語で言われ、訳がわからないまま、エレベーターで上がったたり下がったりうろろして、結局、駅員さんがホームに降りてきてその車両まで連れて行ってくれたが、おかげで2本乗り過ごした。彼女は「京都は駅員さんが親切に対応してくれる」と言っていたが、もちろん事前に電車の乗り方が分かることが望ましい。観光者への情報は比較的豊富であるのに対して、日本語のできない、あるいは障害を持つ居住者に対するケアは十分でないような気がする。
- 障害を持つ学生は、言語によっては自国で診断書を書いてもらって来日しても、日本人のお医者さんが理解できないケースがある。それこそ今いる同じ国の居住者や留学生をアルバイトで雇って翻訳してもらうなどの方法はある。京都には医大もあり、留学生のいる京大病院や日赤でできないものかと思う。お医者さんも専門分野が限られているし、ある難病の治療とかになると、診断できる人は少なくなるのかも知れないことは分かるが、とりあえずどんな言語でも京都市に持っていけば日本語に訳してもらえろというような公的サービスがあれば理想的だ。京都市の外国人向け生活ガイドブックにほとんどのことは載っているけれども、載せてほしい事項はまだまだある。
- LGBTに対しても障害者に対しても、それぞれの国によって受け止め方が違う。逆に欧米の学生は初めの自己紹介で表明したりする人がいて、クラスの間みんなも理解している。一方で、日本よりも認知されていない国から来た留学生は、日本で初めて自己を受け止め、カミングアウトする学生もいる。トイレの問題とか、こちらも言われたら対応するようにしている。

京都の「国際化」を留学生に手伝ってもらおう

- 留学後の就職については、日本の企業に勤めたい、あるいは帰国しても日系企業に勤めたいという学生は一定程度はいる。ただその時言語の問題、日本独特の企業文化とかコミュニケーションの問題があることを認識している学生は結構いる。就職支援はキャリアセンターで留学生対象の企業説明会とかワークショップなどを学内・学外の両方で実施しているし、企業の採用やインターンシップに関する情報についても留学生に流すようにしている。京都の企業はあまりなくて、アマゾンやソフトバンク、パナソニック、イオンなどの大企業に就職している学生もいる。
- 同支社に行きたいという学生なら同志社のホームページを見るが、漠然と京都に留学したいという学生のために、SNSで日本にいる留学生や市内各大学の情報発信のページ、京都市の留学生施策のページなどで構成される、京都への留学希望者のためのフェイスブックがあればいい。そこでは公式の情報や、現在の留学生からのコメントなどだけでなく、同時に京都に留学していた経験者が情報交換したり、現在の留学生にアドバイスしたり、意見交換できるようなものが理想的だと思う。
- 京都府はフランスのオクシタニ州と姉妹州で、その州にあるジュールゲード国際高校と鴨沂高校が姉妹校提携を結び定期的に文化交流を行うために、校長先生と意見交換する機会があった。フランス人留学生が同校の授業に参加し、フランスの年中行事などを紹介したり、日本料理の調理実習をしたりしてた

いへん好評だった。鴨沂高校では「フランスウィーク」と名付けて、留学生と交流する時間を持ちたり、フランスに因んだイベントを行ったが、「国際化」の推進にはたいへん良い試みだと思う

- この間文科省主催のある会議に出席したのだが、大東文化大学は、立地する地域のほとんどの小・中学校に留学生を派遣して、それぞれの国や地域を紹介する授業を行っている。京都には各大学にいろんな国の留学生が来て学んでいるわけだから、市立の小学校で自分の国を紹介するとか一緒に遊ぶとかの時間が持てれば、単に英語の授業をするよりもよほど国際化に役立つのではないかと。外国にルーツを持つ子どもが増えているから、例えば、留学生の「中国から京大に留学してこんな勉強をしている…」といった話を聴くだけで、隣のクラスに中国にルーツを持つ子どもがいるとすれば、その子に対する理解も深まったりするのではないかと思う。

伝統行事等を通じた留学生同士の交流

- 全国の小・中学校現場で日本語教育が必要な生徒は7,000校あまりに及び、その8割弱の学校が1学校当たり4人以下と分散している。「日本語を教え込む」という観念があって日本語能力評価のテストをシステマ的にはめ込もうとするのだが、実際それぞれの子が持つ母語と日本語の両面から見るという考え方が必要になる。日本語能力測定の「外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメント(DLA)」は、アメリカやカナダならお金をかけて開発したコンピュータテストで個々の子どものレベルに合わせていけるが、日本はそんな現状ではなく、日本語をものとして教え込むという体制になっていることが間違いだ。
- 現場の先生はDLAの研修を受けて勉強してスキルアップしていけば使えるようになる。京都市にも外国人子弟を扱っておられる指導主事に熱心な先生がおられ、その周辺の10人ほどの先生方はスキルを持っておられるが、数としてはきわめて少ない。対応が必要な生徒は市内にも一定数いると思う。生徒のアイデンティティ形成や誇りの醸成のためには、本当に母語・日本語両方の教育が必要なのだが、現実にはなかなかそこまで行っていない。結局、マイノリティ政策と高度人材受入れ政策の両方が必要なのだと思う。
- 以前、京大に家族と来ていたある中国人留学生一家は、本人を含めて全員日本語ができなかった。本人は研究室では英語で通じるのだが、学校のプリントが読めず、三者面談でも話ができないなどで困っておられた。その時は知合いが親しい留学生たちに頼んで通訳や翻訳で手助けしたが、家族で来られる留学生もいるので、日本語ができる外国人や日本人を募って登録してもらい、通院や相談など、必要な日に支援できる制度があればいいと思う。もちろん一定の謝礼は必要であろう。
- 現在、言語景観の研究をしている中国人の留学生がいる。有名な寺院や観光地に行くと、京都市が掲げている看板と寺院が掲げている看板など数種類とかいろいろあって、それぞれ解説のニュアンスが少し違っていたり、場所もまちまちだったりするらしい。難しいかも知れないが、そういうのを統一するとかできないか。オリンピックやラグビーワールドカップに向けて観光客もますます増えるだろうし、正確な情報を統一し多言語化することは必要なことだと思う。観光をきっかけに日本語を学ぼうという人も増えるのではないかと思う。
- 全国各地の大学の方々から「京都ブランドがうらやましい」と言われた。祇園祭など伝統行事に参加する企画を同志社として行っている。毎年見学させていただいている白楽天山の保存会の代表理事からの依頼で、本学の留学生が外国語版のパンフレットを翻訳することになった。京都の伝統と留学生が交流しつつ関わり合うことができる素晴らしい企画だと思う。これが1つのモデルケースになることを望んでいる。例えば、京都市や、京都にある企業の方の注目も集めて次のステップにつながる可能性が拓かれると思う。
- この調査研究の企画書にある、留学生をフォローして京都情報を発信してもらおうということは有効だと思うが、国籍やジェンダーのバランスにこだわりながら、発信してほしい留学生ときちんとした契約を結ぶなどする必要があるだろう。
- 伏見で最も古い酒蔵である「月の桂」の増田徳兵衛代表に本センターの韓国の留学生が以前インタビューをさせていただいた。日本酒の全国の組合で海外担当の役員もされていて韓国に行かれたときにその

留学生が再会した。京都には、いろんな業界団体で海外や国際化担当の方がおられて海外への発信などに対する意見もお持ちだろうし、そういう方にも会われたらいいのではないか。

正規留学生と交換留学生がねらい目

- 福田内閣の時に「留学生 30 万人計画」が発表されたのだが、当時留学生の数が伸び悩んでいる時だったので、グラフが右肩上がりに増加していくよう、手っ取り早く日本語就学生も「留学生」に加えて数合わせをしたという経緯がある。2010 年の入管法の改正で、就学生が「留学生」になっても奨学金ももらえないし、何も変わらない。問題は外国人労働者の統計にも留学生を入れていることだ。留学生は資格外活動で正式の労働者ではないはずなのに。しかし、今は彼らがいなくて飲食業など業種によってはやっていけない。彼らがコンビニの弁当づくりを支えている。2 年日本語学校にいてアルバイトして帰国する「出稼ぎ留学生」になっている留学生もいる。あるいはレベルに関係なく受け入れる専修学校があって、3 年間ろくに勉強もせず昼寝て夜働くような、卒業もしない生徒を受け入れている。そういうのは本来の留学生ではない。マスコミで「出稼ぎしている留学生」というのが報じられるので、今回のプロジェクトも誤解を招きかねず、そうではないことを断っておくべきだ。初めにこのプロジェクトが対象とする「留学生」は、「高等教育機関で」「じっくり勉強する」留学生のことを指す、という定義をした方がいい。
- 大学・大学院の留学生となると、一筋縄で行かないところがあり、学部生は増えていないが、院生は例の大学のグローバル化とかで増えている。各大学で英語だけで卒業できるコースを作っているが、日本語力がないので実質的に日本で就職できない。大学は国からの補助金が出るのでやっているが、その補助金も年々減らされていてまったく無駄なことをやってグローバル化の数合わせをしている。学部から大学院までいる学生は 5、6 年京都にることになり、彼らは地域になじんでいるし、今回の「留学生」としてイメージしやすい。それから「交換留学生」は 1 年だけだが、京都が忘れられずに大学院に入り直すとかして戻ってくる学生が多い。積極的に京都に関わりたいと思うのは交換留学生だ。ある程度お金があるし、なくても 1 年間だけと思っているから、京都の文化に興味を持つ。東京へ行った子でも休みに京都に来たりする。
- 交換留学生は卒業後、留学したあとでも連絡が取れる。大学の留学生担当者の良くないところは帰国後連絡取っていないことだ。面倒くさいからやらないということだ。せっかく育ったのに帰国して連絡を取らないのは確かにもったいないと思う。交換留学生のその後のことは各大学の留学生センターや国際部が大体把握している。だから学部から入る正規留学生と 1 年だけの交換留学生は「京都の友好親善大使」として期待できる。
- 「正規」の数は中国、韓国が多くて、韓国は減りつつあるがベトナムがすごい勢いで増えている。ただ非漢字圏だからなかなか大変で、漢字圏の留学生のように授業についていくのは大変だ。交換留学生も 2 種類あって、中国などは日本語能力試験 N1 を取ってくる子が多く、専門課程に入って論文を書くからあまり時間の余裕はないが、ヨーロッパ系の学生は N3 くらいがせいぜいで、遊びのような感覚で、どうせ 1 年だし日本に慣れるくらいでいいと思っている。しかしパワーがあり、神社仏閣を積極的に回ったりする。

留学中から情報発信してもらおう

- 9 月に来日することが多く、来た当初は慣れていないが、年明けのころになじむ。すると全国を旅行したりして活動的に動く。京都も客観的に見るようになって改めてその良さに気付く。だから京都に友好的な情報発信者ということになると、前向きな交換留学生が良いことが多い。以前、私のところに着物が来たくて京都に来たというスペイン人留学生がいた。東寺の弘法市でいつも着物をあさっていた。帰国して日本語の先生をしているが、彼女などはお茶も習ったりして日本文化を積極的に学ぼうとしているから適任だ。一方、正規留学生は忙しくてお茶を習うお金も時間もないかも知れない。交換留学生が京都の文化を発信するには適任だと思う。
- 企画書では留学生が「帰った後」を強調されているが、留学中にも発信は可能だ。帰ってしまうと情報発信はしてくれるだろうが、何しろどういところで発信しているかが見えないので分からない。むしろ「こういう発信をしてほしい」と直接的に頼んだほうがいい。もしくは海外からアクセスしやすいサ

イトを立ち上げて「そこから文化情報、観光情報を投稿して」と頼む。それだと滞在中も帰った後もいろいろ投稿してくれる。

- 大学もいろいろあって、留学生の多い某国立大学などは留学生の面倒見が悪い。留学生は日本語が話せるのが当然、のようになっているから、日本語教師もいなかったりする。留学生のことをあまり知らない大学の担当部局よりも、各国での「留学生会」のようなしっかりした組織があるから、各国留学生会の会長を紹介してもらってそちらにアプローチする手がある。
- 国費で来ている優秀な人が多く、そんなにアルバイトしなくてよく時間がある。各大学が海外で「留学フェア」のような形で大学の宣伝をするイベントを行っているが、その機会に各国の留学生会が同窓会のような集まりを行う。京大の留学生会とかになると、そういうネットワークは自分たちのプラスになるから、しっかりした組織として機能している。中国や韓国の留学生会は大きな組織だから、そういうところにアプローチする。京大の「インドネシア留学生会」の会長は私の知り合いだ。
- 各大学の留学生担当の先生は学内の待遇的にはあまり恵まれていない。それでも頑張っている先生は、私も含めてすべて個人的ボランティアで、留学生が困っているのを見ておれないという気持ちから手伝っている。一方で、言い方は悪いが、いい加減な研究テーマで留学生にドクターを出して、留学生何人にドクターを出したという業績づくりに熱心な先生もいる。国に帰れば仕事もあるから就職の世話をする必要ないし、こんな楽な院生はいないということになる。結果として、いい加減でも日本でドクターを取って帰れば政治力を持つようになり、その国の大学の教育に悪影響を与える。そういうケースを東南アジアの国でいろいろ見た。本当に悔しい。「入れたのならちゃんと責任を持って教える」と言いたくなる。
- 理系は世界中ほぼ同じ基準なのであまり問題はなく、主に文系の話だが、日本人にはドクターを出さなくても留学生には適当に出す。すると本当に勉強したくて来た連中がそういう者と同じに見られたりして嫌になる。すでに日本の文系ドクターの評価は東南アジアで下がりつつある。日本びいきになる者もいれば、いろいろあって「反日」になって帰国する者もいるのは残念なことだ。だから、根本は日本の大学教育の質の問題があり、日本の大学は何のために留学生を受け入れるのか、どんな留学生を育てようとしているのかということが、改めて問われていると思う。

企業に求められる日本型雇用システムの説明

- 私が専門のインドネシアなどは日本語ができる留学生は、帰国したら日系企業の就職率はほぼ 100%らしい。先生からするとうれしくてたまらない。反対が韓国。今は少し復活しつつあるが、日本語をやっても就職がないから、日本語の教師としては辛い。インドネシアの各大学はみんな日本語学科を作りたいのに、いい先生がいないので作れず困っている。この「ブーム」がいつまで続くかわからないし、国と国との関係で大きく状況が変わることもある。ただ 2 億以上人口がいて、アセアンの中心国として日本企業の大事なマーケットだからある程度は続くのではないかと見ている。
- 留学生の就職については、厚労省に就職サイトがあって各地で就職フェアをやっているといった情報が掲載されている。2、3 日前の毎日新聞群馬県版に、留学生の就職を世話すると言って金をだまし取った日本語学校があったという記事が出ていたが、そういう嫌なニュースは後を絶たない。経産省の委託研究で、企業がどんな留学生を採用したいか、どんな仕事をさせるかを明らかにした調査研究があって報告書が出ている。それによると、人手不足にもかかわらず日本人の若者は 3 年でやめるが、留学生は簡単にはやめないから採用するという結果だった。ビザという枠があるからやめられないというのが本当のところだ。留学生からすれば、日本の企業は始業時間は決まっているのに終業時間がダラダラしたままけじめがなく、就業時間がはっきりしない。最も困るのは、自分の将来計画が見えないことだ。どんなステップでどんなスキルを積んでいけばいいかが分からない。企業によっては、初めはコピー取りとか単純労働をさせ、だんだん難しい仕事になっていくが、第一線で頑張ろうと入社した留学生にしたら、そのシステムが一番分からないらしい。日本ではそこから上に上っていくという説明もなくいきなり簡単な仕事につかせる。
- 要するに、日本企業の従業員への将来計画の説明不足が最も問題が大きい。事前に就職説明会に行っ

も彼らがほしい情報が入らない。企業側も留学生がほしい情報を知らないことが多い。日本の企業も外国人を入れるのに慣れていないし、留学生が就職できない理由にはけっこう根深いものがある。企業文化もあるが、採用の段階で日本型雇用システムを分かりやすく説明する必要がある。例えば、3年後の時点で昇進試験があり通れば上に昇進できるが、誰でも昇進できるわけではない…といったことだ。日本人にとっても必要なことだ。

- 今「高度人材」と言い方をするようになったが、以前はこのような枠は弁護士とかプログラマーとか特殊な職種だけだったのが、安倍内閣の「人生100年構想」に「産業人材」という用語が出てくるが、それは留学生問題の研究者が作った用語に飛びついたにすぎない。5年ないし10年のビザを出す外国人を、今までの単純労働だと出ないから名前を換えて10年出すようにした。大阪の工場などレベルの高い技術のところは技能実習生が3年や5年で帰られたらものにならなくて10年はいてもらわないと育たないとテレビで言っていた。
- だから、留学生が就職するための将来のキャリアのあり方を見せるシステムを日本の企業は持っていなくて、腰掛けで就職したり、より給料のいい企業へ移って行ったりすることになる。日本人は「なぜ辞めたのか」と怒るのだが、彼らからすれば条件のいいところへ移るのは、世界中当たり前のことだ。労働者の問題で言うと、現場でほしい人材は、大企業はブラジル、ペルー、フィリピンなど日系人で派遣の資格で請け負う。大企業ならある程度長くいられる。中小企業は技能実習生で、技能実習生は条件の悪いところで働く。だから外国人労働者が二層に分かれていて、その真ん中に新たに「産業人材」を入れようということだ。

観光案内、交通案内をわかりやすいものに

- 私は日本語を教えていて、彼らが日本に来た背景を知らないと教えられないから労働問題も勉強しているが、多くの日本語教師は日本語だけ教えていればいいと考えている。しかし、私は彼らがどんな思いで来ているか、家族と一緒になのか…と背景を聞いてから教える。家族と一緒に来ていればまた状況は違う。ちょっと聞くだけで、ものすごく対応しやすくなる。日本語教師にはそういう視点が必要だと思う。
- 技能実習生が日本の農業も支えているが、新たに農業人材を特区で受け入れたりしている。同様のケースに介護人材がある。日本の介護技術を東南アジアに広めるという名目を某国会議員が言い始めた。実際は介護人材が足りないから受け入れるのに、表向きは介護技術を海外に広める人を入れると言う。悲しくなってくる。そういう外国人受け入れのバックボーンを知る必要がある。
- 日本語教育推進議員連盟という超党派の組織を国会議員の方に作っていただき、日本語教育の普及の基盤づくりに努めているが、今のまま放っておくと日本語ができない外国人がどんどん入ってきて、日本語ができないままで自分たちの権利もアピールできないままで帰国してしまう。訳の分からないままお金を取られて帰国するということは避けたい。技能実習生で企業単独型で受け入れているところは面倒見が良くて、あまり問題はなく3年したら惜しまれつつ泣きながら帰っていく。問題は全体の90%近くを占める管理団体型のほうで、彼らの対応が外国人労働者の日本に対するイメージを悪くしてしまう可能性がある。日本が働きやすく、いろんな人が来てくれるような国になるためには、いろいろ改善すべき点がある。これから日本人が英語や中国語をペラペラしゃべれるようになるとは思えないし、だとしたら、押し付けは嫌だが、彼らに「申し訳ないが、日本で生活しやすくなるために日本語をマスターしてね」と言うしかない。
- その時習得の問題は漢字で、聴いて話すだけならいいが、書くのが困る。道案内なら京都でもローマ字表記を増やせばいい。漢字表記が日本語習得の最大の壁になっている。日本語は世界的にも聴いて話すだけなら楽な言語で、語順を変えても結構理解できる。それから表記でローマ字で「〇〇byoin」と書いてあってもhospitalという意味とは分らない。「△△jinja」というのもまずい。京都市内の観光地の表記はどうだろうか。初めて来た日本語がまだできない交換留学生などに対してはそういう配慮がある。神社仏閣の説明にしても英語や中国語訳に難しいものが多い。なまじ専門的な仏教用語が書いてあったりして分かりにくいから、観光用と割り切ってわかりやすい説明をつければいい。今だとWi-fiで解説が出るようにできる。観光客はみんなスマホを持っているのだから使える。スマホのポータルサイトで

適切な訳を見つかったり、欲しい情報・知識を探したりして理解を深めている。それを使って発信してもいい。市バスの乗り方や交通案内も分かりやすい訳を工夫すべきだと思う。

大学は明確な留学生政策の指針を

- 日本語教育等の現場とは違い、各大学のトップは「グローバル化の推進」ということで留学生を増やそうとしている。私が大学にいたときは留学生がどんどん増えていったから、パーティに 200 人以上集まったことがある。しかし、この 2、3 年は減りつつある。大学の中にいる多くの人が、日本に来た外国人は日本語ができると思い込んでいる。ただ、大学でも日本語教育に力を入れたり、日本語のできない学生のために英語の授業をやったりして受け入れる。しかし、先生方からすれば、特に文系は日本語がちゃんとでき自分で勉強できる、手間のかからない「楽な」学生は引き受けるが、育てるという気はあまりない。事務方にしても、問題を起こす学生がいたりするから、大学のトップの意向に反してあまり受け入れたくないというのが本音かも知れない。
- 問題は、留学生からすれば先生は生殺与奪の権利を持っていて、嫌われたら帰国しないといけないと思っている。だから先生の顔色を見るようになる。私がリュ学生から必ず聞かれるのは「謝り方の日本語が分からない」というものだ。日本語で謝るのは難しい。それをどこも教えていない。「先生が忙しいと言って教えてくれなかった」など直接に言おうものならたちまち怒られてしまう。だから顔色をうかがう。受け入れるということはものすごく面倒くさいことだが、そうしたきめの細かい対応をする必要がある。日本の教育システムにはそれがずっとなかったのではないか。
- 最近では、ビジネス日本語もいびつな表現を教えたりしている。「上司に逆らったりしたらダメ」とか、「そんなチマチマしたことはするな」とか、日本に同化させようという例文が出てきている。テレビでやっていたが、イモトアヤコがアゼルバイジャンの日本語クラスで教えている日本語を聴いていて笑い転げていた。今日本語教育の中でビジネス日本語が成立しない。会社員で日本語教育をまともにやったことがないような人が、変な例文を入れて自分たちに都合のいいような「ビジネス日本語」にしている。最近では子どもの日本語教育をやる人は増えてきたが、ビジネス日本語を研究する研究者は少ない。それが現在の日本語教育の弱点になっている。昔は J I C A が企業と組んでビジネス日本語をやっていたのが今はなくなり、漢字検定協会がやっているが使い物にならないものになってしまった。ビザの更新のときに使えるだけだ。岩盤規制の緩和で民間に渡した結果がそれだ。
- 大学も日本人学生を送り出したいから外国に提携大学をたくさんつくる。今の日本の大学は外国経験さえあればいいという風潮になっているが、それでは大学の国際化などはできない。積極的なのは関西外大で、かつては日本でいちばん交換留学生が多かったが、今は減ったのではないか。というのは、ある 1 人の熱心な先生が世界中飛び回って提携先を探していたのが、今は辞められ、後に続く人がいなくなった。多くの日本人学生は、主に英語圏の大学へ行ききたがる。そのため、提携先も英語圏の国の大学を探すようになる。今来ている学生たちが「龍谷大学に行って有意義だった」「立命館に行って楽しかった」と言えば、次はまた来る。留学生政策の明確な方針を持っている大学はうまく行っている。
- 「留学して英語ができるようになれば就職口が広がります」と入学式で言うものだから、日本人学生の親も期待する。学内にもある程度外国人がいるものだから、これがグローバル化だということになる。だから交換留学生を増やそうとするのだが、いずれ行き詰まると思う。イギリスはかつて留学生はイギリス人と同様に授業料タダで旧イギリス領のアフリカとかからたくさんの若者を迎え入れ、イギリスの活力を支えていたが、大学への予算減額でやめた。今は、留学生から多額の授業料を取るようになった。日本など教育にお金をかけない国として OECD で下から 2 番目だし、この先どうなることか。

日本語教育を文化戦略として位置づける

- 留学生の根本問題は国の教育政策に関わる。そして各大学は自立せよと国は言い、各学長がどこまで独自性を持ったプランで留学生政策に当たれるか。秋田国際大学などはユニークなプランで進めており、試験がダメなら落として留年させる厳しさがある。ただ、どこまで就職が続くかだ。市内の大学で、留学生政策を期待できる新しい学長が就任したことがあったが、学長の下に国際交流に強い、熱心な事務方がどれだけいるかどうかで成果が決まる。学長のために走り回る人がいて、研究現場も学内政治もよ

く知っている人が手伝い、事務方も統括できる学長であれば期待できる。

- 京都などはまだまだ財産を活かしきれていない。よその町はいろいろ苦勞してテレビとかに情報提供しているのに、京都は、放っておいてもマスコミが取り上げてくれる。今回の企画も日本を代表する都市である京都が、どこまで本気になって情報発信する気があるのかで成果が決まる。観光客を増やせばいいのか、それとも将来も日本に住みたいという人を増やすのか。今留学生はお客さん扱いだ。彼らを将来のまちづくりの担い手として、新しい京都の町に変えてくれるように仕向けるのが大事だ。少なくとも京都は他都市にはない魅力を持っているが、京都の市民に彼らを受け止める度量、覚悟がどこまであるか…。今回のプロジェクトはいろんなことが問われている。
- 龍谷大には交換留学生が全員入れる寮があり、1年目は宿舍探ししなくていいという長所はある。他大学でも頑張っって宿舍を作っているが、たいてい人里離れていてアルバイトに行けないという欠点がある。龍谷は市内のアパートも借りていてきれいではないのだが、家賃が安くアルバイトに近いというので留学生には評判がよかった。少々汚くても安いほうがいいし、アルバイトにも行きやすいというわけだ。新しくきれいな宿舍でも郊外に建てると交通費がかかってしまう。日本人の思っている感覚と留学生の要望は違っている。
- 日本人がいいと思う環境は必ずしも留学生がいいとは限らない。障害者と同様、留学生を隔離するという発想はいけない。部屋を借りるとき留学生は大変で、昔は京都のすべての大学が一緒になって留学生のアパートの保証人になるシステムがあり、数年前に京大、立命が単独でやり出したので、今はその他の大学が一緒になって保証人になっている。以前は、外国人の顔を見て断っていた京都の不動産屋にこのシステムを分からせるのに時間がかかった。龍谷は8割の留学生が寮に入れるからまだまだだが、寮のない大学のアパート探しはものすごく大変だ。京都では、まだ「住」の問題が大きい。そのあたり京都の大学の統一したシステムがない。龍谷大学が借りているアパートは向日市にあるが、私からすると遠いと思う。漢字の読めない留学生が、向日市から京都市内に電車で来るのは大変なことだ。アナウンスも発音に癖がある。アパートそのものは安くて、近くにスーパーもあって住みやすい環境なのだが、電車を乗り継いで深草まで来られるかどうか。非漢字圏の人からすると分かりづらい環境のようだ。
- 今後インドは日本語教師を1,000人養成すると言っている。難しいことだが、外交的にはたいへん重要で日本は力を貸すべきだと思う。留学生はそれぞれの母国と日本をつなぐだけでなく、次に日本が生き残るための外交戦略にも関わってくることを大学がどこまで理解しているか。日本びいきの若者を作ることとは大事なことだし、日本語教育は日本の文化戦略だと思う。国も文化戦略として位置付けるべきだ。戦争ではなく、日本という国を守る一つの方法だ。